



佐世保 ライフ 1 ー まち



佐世保の中心市街地のアーケード街

「SONY 製品はいいが、高いな」

アーケード街を歩いていたら、突然、英語で声をかけられた。声がした方を見ると、アメリカ人のお兄ちゃんが並んで歩いている。少し手前にあった、SONY の専門店から出てきて、隣に来たらしい。

一緒に歩きながら「何を買いたいのか」などと話をしていたら、突然「もうじき、アメリカから婚約者がやって来て、結婚するんだ」と言う。

「Congratulations」と言うと「Thank you」と言って、米軍基地につながるアルバカーキ橋の方へ曲がって行ってしまった。

アーケード街の裏にある天ぷら屋に入って、カウンター席に座って定食を食べていると、初老のアメリカ夫婦が入ってきて隣に座った。

奥さんが板前に「あれはあるか、これはあるか」と英語で食材の名前を出して聞いていたが、「sweet potato」がなかなか通じない様子だったので、板前に「サツマイモだよ」と言ったら「ない」の返事。



軍港の街佐世保

佐世保ではサツマイモは天ぷらにしないのかなと思っていたら、奥さんがこちらを向いて「Thank you very much」、

「Your welcome」と返すと、

少し間をおいて何回も言うので

「Your welcome」、「Not at all」を繰り返していたが、煩わしくなって食べるのに専念した。

アーケード街にあるスーパーの食品売り場で、アメリカ人の老夫婦が、長い沢庵を持って二人でしきりに首をかしげながら話している。

こちらを見て「これは何だ」と聞くので、たまたま買い物かごに入っていた、おでん用の大根を見せて「これのピクルスの一種だ」と答えた。

「どうやって食べるのだ」

「切って食べるのだ」

「なんだ、そうか」

疑問が解決したらしく、買わずに行ってしまった。

米海軍基地のある軍港の街「佐世保」では、こうしたちょっとした出会いがあった。

横浜市役所の定年退職までの期間を一年残して、1999年3月31日「パシフィコ横浜」で開かれた市長主催の歓送会を抜け出し、職場で贈られた大きな花束を抱えて羽田空港へ直行、ANA長崎行最終便に搭乗した。長崎空港から、ハウステンボス経由佐世保駅行きの西肥バスに乗り、夜遅く、官舎となるマンションのまだがらんどうの部屋に花を飾って、翌朝一番、佐世保市庁舎に出勤、辞令を受け取った。



写真中央が「佐世保駅周辺再開発事業」地域



九十九島



西海橋

九州の西の端に位置する佐世保市では、佐世保駅を中心とするエリアを再開発し「心やさしい海辺のまちへ」をコンセプトに、街を港につなげる大事業を進めていた。

横浜と同じ頃に誕生した港町だが、軍港としての歴史的、地理的な状況から、市民生活の場である街と、港との間に接点がほとんどなかったが、その歴史に終止符を打つ事業が、最終段階に入っていた。

都市デザインの立場から、この事業を中心に街づくり全般について見てほしいという要請を受けての着任だった。

何時までということではなく、新しい地での生活が始まったが、結局、7年間の佐世保ライフになった。

佐世保市へは、直前に打合せのために来たが、それ以前には2回ほど訪れる機会があった。

一回目は大学生時代に、高校時代の親しい友人と二人で、九州一周旅行の途中で一泊した時と、二回目は横浜市役所時代に、出張で長崎市役所と佐世保市役所を訪れた時である。

最初の九州旅行の時は、父に「九十九島という美しい場所があるから是非寄った方が良い」と勧められてコースに入れた。

父が戦地から復員した時に、復員船が到着して上陸したのが佐世保の浦頭だったそうだ。

一泊して、完成して間もない西海橋も見に行った。



最初に訪問した昭和 40 年の佐世保(読売新聞)

アルバイトで貯めた金で回る儉約旅行で、友人達の実家に泊まったり、現地で宿を探し、料金を交渉して泊まったりした。

佐世保では駅前の旅館に宿泊をしたが、朝、出かけようとしたら自分の靴がない。一足だけ残っていたのは形も大きさも違う靴だったが、先に出た客が間違えて履いていったらしい。

その客が引き返してくるかもしれないと思い少し待ったが、いつまでも待っているわけにもいかず、とりあえず残された靴を履いて、痛いのを我慢して観光に出かけた。

時々宿に連絡を入れながら観光を済ませたが、靴の行方は知れず、やむなく旅館と交渉して運動靴を買い、その後の旅行を続けた。

佐世保といえば、まず、これが忘れることのない思い出だった。

2 回目に佐世保市役所に行った時は、大雨が降った次の日で、対応してくれた都市計画課長が「住宅の崖が崩れる災害があり、急遽現場に出かけなければならなくなった」と中座した。

東京に戻ると、夜のテレビの全国ニュースに、その災害の様子が映像とともに報道されていた。

佐世保については、「軍港都市」というほかには、この二つの出来事の印象が大きかった。



最初に訪問した頃の佐世保駅前

赴任するにあたって、およそ 40 年振りに見た佐世保駅前の光景は昔の印象そのまま、懐かしく思った。

市役所の年配の人に話すと「佐世保の街はそんなに変化していないし、駅前の旅館もまだありますよ」とのこと、ゆったりと時間が流れている街という印象を持った。

そして、この風景を大きく変える事業に関わることに感慨を深くした。

「佐世保駅周辺再開発事業」と命名された佐世保にとって 100 年に一度という大事業は、国、県、市、鉄道事業者、地元が連携して行う 7 つの事業によって構成されていた。

自分が佐世保に招聘されて来た時は、これらの事業が終盤の仕上げをするタイミングだった。

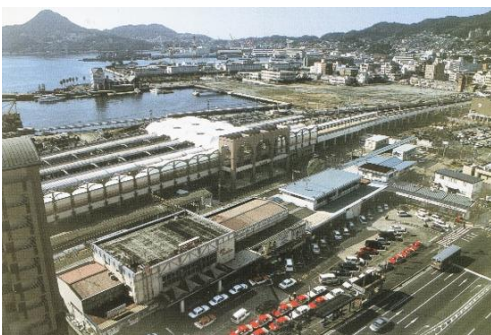


事業前の佐世保駅周辺再開発エリア

佐世保駅は港に最も近い位置にあるのだが、駅の港側は鉄道施設や魚市場があり、市民からは「駅裏」と呼ばれ、街と港との接点は、上五島や県内への行く船の乗降場ぐらいだった。

再開発事業は、この駅の裏側に新しく高架構造の鉄道と駅を建設し、街側と港側とを自由に通行出来るようにする。

そして、鉄道の国道側は土地区画整理事業で、港側は魚市場を移転し、海を埋め立てて街を造り、開港以降初めて、中心市街地を直接港に面する街にするという事業であった。



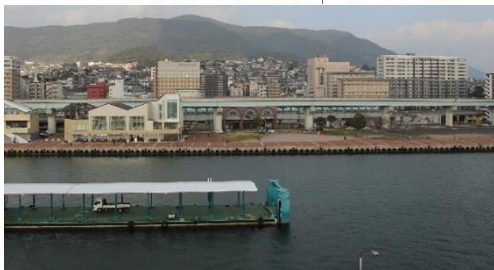
旧佐世保駅舎の後に新駅舎が完成している



佐世保駅周辺



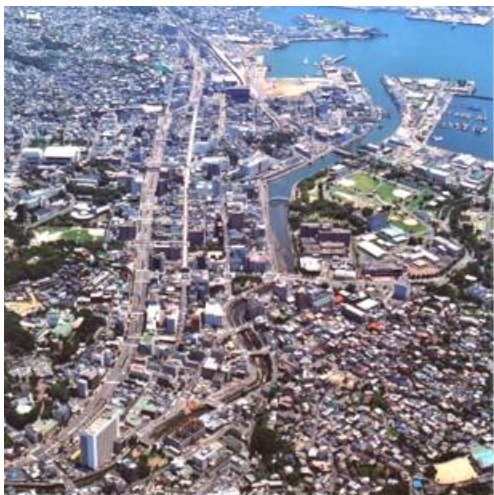
港側から見た高速道路が出来る前の景観



高速道路と五番街完成後の景観



市街地の背後の斜面住宅地と緑の丘陵



中心市街地を形成する三本の都市軸

鉄道の高架化と新駅舎の工事はほぼ完成しており、国道と間の土地区画整理事業は仮換地を終え、駅前広場や公園、道路などの基盤施設は、仕上げ工事に入る段階になっていた。

建物の建設も始まっていて、駅前の再開発ビル「エスプラザ」は既に完成し、2000 人収容の大ホールが入る「アルカス佐世保」と命名される施設は躯体工事が完了間近で、隣に建設される「戸尾地区再開発ビル」も着工していた。

一方、鉄道の港側の海は、埋め立てが始まっていた。

新しく生まれる土地と鉄道との間には、幅員 40m の県道と、その上空に高架構造の高速道路が計画されていた。

しかしこの高速道路については、二つの市民グループから高架反対の運動が起こされていて、自分が着任する前日には、市民ホールに満員の市民を集めたシンポジウムも開かれていた。

そのために、この高架構造問題の收拾を図るのが最初の仕事になった。

状況を整理してみると、都市計画の事業決定という手続きもなされており、後戻りは出来ないタイミングになっていた。

そのため、対応の可能性に対する提案を行いながら、市民グループ、議会、事業者などの間で共通認識と合意を得ながら、景観的な配慮などに最善を尽くすことで收拾することが出来た。

佐世保発祥の地である現在の中心市街地は、港と緑の丘陵に囲まれた谷間につくられていて、東京の区部のように、同じような市街地が途切れず広がっているのとは違い、街並みの背景には斜面住宅地と緑が屏風のように控えている。

その中心市街地の中央を、「アーケード商店街」をはさんで「国道 35 号」と「佐世保川」が並行して縦断し、歩行者と車と自然という異なる性格をもつ一つの軸として、街の骨格になっていた。この明快な市街地の構造は、開港以来 2 回にわたる都市計画によって造られていた。

最初は、1889（明治 22）年「佐世保鎮守府」が置かれたことにより、佐世保川右岸を中心に戸数 1000 戸程度の農漁村が、左岸の干拓地や埋立地に計画された格子状の道路網に沿って市街地を拡大してきたこと。



国道が右に折れ、正面にアーケード商店街



三ヶ町アーケード街



アーケード街の大パーティー



島瀬公園



飲食店が多く、夜に賑わう夜店公園通り



校庭下の防空壕を利用したトンネル横丁

次は、市街地の拡大と人口の増加に伴い、増大する交通量に備えて幹線道路の整備を計画し、当時、最も発展していた旧「本通り」の道を避け、戸尾交差点で道路を曲げてバイパスとし、第二次大戦の終戦の年まで12年間をかけて完成させたこと。

こうして、車の交通から解放されて更に賑わうようになった旧「本通り」は、今日の「アーケード商店街」になっている。

一見どこにでもあるようなアーケード街だが、地元の活発な活動もあって、人通りが絶えず、空き店舗もほとんどない。

地方都市のシャッター通り商店街が問題になってきた頃からは、25万都市では日本で一番元気の商店街とも言われている。

特に、毎年暮れに開かれる、イルミネーションを中心にした「きらきらフェスティバル」の期間中に、市民の主催と参加で開かれる大パーティーは圧巻である。

日本一長いと言われるアーケードの通りが会場になり、市民が、テーブル、食べ物、飲み物を持ち寄って賑わう。

通りは七つの町を貫いていて、上流側は三ヶ町商店街、下流側は四ヶ町商店街と呼ばれ、延長が約1km、幅員が約15mあって商店街としては長くて広いが、通りに面して「松浦公園」「島瀬公園」「京町公園」の三つの広場公園があり、特に「島瀬公園」は両商店街の中央にあり、国道のバスストップにも面していて、様々なイベントや休憩などに活用されている。

周辺には「夜店公園通り」「戸尾商店街」「トンネル横丁」など、それぞれに特徴のある商店街も控えている。

このように、多くの市民が利用し易い位置にあるこの通りは、単なる商店街というだけでなく、歩行者空間としてさまざまに利用され、市民生活の場として街の中心的存在になっている。

佐世保川の上流側にあった村が、開港によって急激に発展して街になり、市街地が下流側に広がっていくとともに、街の中心もこの通りに沿って移動してきた。

そして、その先にある佐世保駅の周辺に、再開発事業によって港に面する街が誕生することになるため、中心市街地全体が港と一体になるための歩行者空間が必要と考えた。

そこで新たに、港に通ずる歩行者空間のネットワークを設定し、それまでの計画に重ねて加えた。



ポートサイドテラスに面した施設づくり



新みなと広場と近海航路ターミナル



ポートサイドパーク



官公庁施設の建物が集中するエリア



ポートサイドテラスの向こうに大型客船



軍港の街に停泊するクルーズ船

水際線に沿った「ポートサイドテラス」と名付けられた岸壁を歩行者空間に位置づけ、アーケード商店街や佐世保駅からアクセスする道を、5本の歩行者軸として煉瓦で舗装した。

そして、これらの道に面する施設に働きかけ、歩行者にとって快適な空間となるよう、協力を得ていく計画とした。

さらに具体的な施設の事業提案募集に当たっては、質量ともに中心市街地全体とのバランスに配慮した、海辺のまちに相応しい施設が立地するよう、工夫と努力を続けた。

また、この駅周辺の地区とともに、都市軸のもう一方の中心である市役所周辺の地区においては、国の合同庁舎建設の際には桜並木の保存を、市の保健福祉センターの建設の際には周辺の歩行者空間を整備し、地域の一体化を図る計画を進めた。

しかし両地区の事業とも、最終段階にかかる前に、佐世保市役所を去ることになってしまったのは残念だった。

そして一方では、こうして歴史的に積み重ねられてきた街づくりに、大きな影響を与えかねない問題が起きていた。

当時、全国的に中心市街地の空洞化現象を起こして問題になっている大規模商業施設の出店が、佐世保で唯一の優良農地にも進出する計画の申請が出された。

賛成と反対の多くの陳情が市に提出され、市民を二分するような大問題になったが、佐世保の街づくりにとって悔いのない結論が出されるように全力を尽くした。

退任後に、海辺のまちには「五番街」と名付けられた二階建ての商業施設が造られた。

そして「五番街」と水面をはさんだ埠頭にある港湾倉庫が、リノベーションされて国際客船ターミナルに作り変えられ、大型のクルーズ客船が頻繁に訪れるようになっている。

灰色の軍艦が並ぶ美しい港に、白い大きな客船が浮かぶという、これまで考えられなかった光景は、佐世保の街のこれからの姿を象徴しているようにも見える。

どのような市民生活が送れる「心やさしい海辺のまち」へ育っていくのか、大変楽しみである。